

丈草發句集

「やぶちゃん注」底本は国立国会図書館デジタルコレクションの昭和一〇（一九三五）年有朋堂刊の藤井紫影校訂「名家俳句集」の「丈草發句集」パートを使用した。原本発句部は二段組である。同書「標題」には、

*

丈草發句集 編者詳ならず、蓋し京都の俳諧書肆井筒屋などの集めしものか。

*

とあるのみである。但し、終わりの「追加」の前に「安永三午歳六月」「翠樹堂」とあり、この翠樹というのは、調べて見たところ、但馬豊岡の俳人或いは俳諧趣味のパトロンの思われ、また、安永三（一七七四）年板行の蝶夢編「丈草發句集」（[個人サイトのこちら](#)）で全篇（？）が読める。ほぼ正字であるが、横書きである）と序と終わりの方のこのクレジットと署名が全く同じで、採用句も酷似しているから、同版系列の別編集本かとも思われる。なお、私はその電子データは一切、利用していない。

内藤丈草については、私の「[柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 一](#)」の私の冒頭注を参照されたい。なお、柴田氏の同作ではここに出るかなりの句が掲げられ、内容への言及もあり、また、詳細な注を私が附してある。[こちらから全部が読める](#)（但し、底本の関係上、新字新仮名である）ので、そちらも是非、参考にされたい。そちらで注したものは基本的にはここでは注さないで、丈草についての評釈本や、纏まった句集を未だ読んだことがない方は、まずは、そちらを通読されてからこちらを読みたい。

本電子化では、読み易さを考え、句の間を一行空けた。前書の改行は底本通りとした。底本では句が総て均等割付になっているが、無視した。踊り字「く」「ぐ」は見栄えが悪い（というか、私は生理的に激しく嫌いである）ので正字化した。また、「ゝ」に濁点を附した記号が用いられているが、表示出来ないもので、「ど」に代えた。藤井氏の頭注は本文の注記号を除去し、頭の注番号（丸括弧数字）も省略して、当該句の後に【】で添えた。特に必要と思われる部分のみの注に留め、意味をとれない句はそれを正直に述べた。」

丈草發句集

丈草俗姓は内藤にして、世々尾張の國犬山の城主に武を以て仕ふ、文を右にして和漢の才あり、若きより佛乘に歸して玉堂和尚の禪意を傳へ、奉公を辭して薙髮す。偈曰、多年負屋一蝸牛、化做蛞蝓得自由、火宅最惶涎沫盡、追尋法雨入林丘、發句、涼風にきゆるを雲の舍り哉と云々。終に故郷を去りて、湖南の栗津龍ヶ岡に茅屋を結び、佛幻庵と號し、芭蕉翁を開祖とす、近くまで其跡ありて、岡の堂といふ。翁の滅後山に籠りて、師恩の報せむために、一石一字の法華經を書寫して墳に築く。元祿十七年の春二月廿四日病床に坐化す。墳は龍ヶ岡の東林の中にあり、正秀が墓に隣る。

「やぶちゃん注…文中の「發句」の後の字空けはママ。」

丈草發句集

春

うぐひすや藁の木畑の朝月夜

竹簀戸のあふちこほつや梅の花

【一本「竹簀子にあほちこぼすや」とあり】

床脇は梅さくかたか荷茶屋ニナヒヂヤヤ

待つことは梅にあるかも茶摺子木

奉納

梅が香や湯立の跡の炭の切

片星根の梅開きけり烟出し

遲望が新宅を賀す

水仙に作事は濟んで梅の客

尾張の國に春を探りて

梅の花散り初めにけり難追風

「やぶちゃん注…座五は恐らく「ついなかぜ」と読ませていよう。」

芭蕉翁の往昔を思ふ

梅が香に迷はぬ道のちまた哉

引寄せてはなしかねたる柳哉

我事と鯨の逃げし根芹かな

「やぶちゃん注…「鯨」は「どぢやう」。泥鰌どじょうのことである。」

寒だけは寒く、土用だけは

暑し、春ひとり何ぞ餘興な

きや

春だけはもちのこさぬや面白み

背戸中は冴返りけり田螺殻

里の男の田螺殻を水底に沈

め、待ち居たれば、腥を貪

る鯨のいくらともなく入り

籠りて

入替る鯨も死ぬに田螺がら

【一本「入替る鯨もあるに」とあり】

取付かぬ心で浮ぶ蛙かな

梅本寺に遊びて

松風を打越して聞く蛙かな

草庵

火を打てば軒に啼合ふ雨蛙

のら猫やうかれ行くほど松の中

歸る空なくてや夜半のやもめ鴈

眞野雄琴雲雀にとゞく煙哉

朝ごとに同じ雲雀か屋根の空

支考餞別

松風の空や雲雀の舞ひ別れ

燕の鴈に問うてや鳩まはり

蘆文に別るゝとて

落付の知れぬ別や鳳巾イカノボリ

大原や蝶の出で舞ふ朧月

陽炎に隣の茶さへすみにけり

芭蕉翁の墳に詣でて我病身
をおもふ

陽炎や墓より外に住むばかり

春雨や何から言はむ嵯峨戻り

春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴

身を風雲にまろめ、あらゆる
乏しさを物とせず、唯一つの
頭の病もてる故に、枕のかた
きを嫌ふのみ、惟然子が不自
由なり、蕉翁も折之を戯れ興
ぜられしに、此人はつぶりに
のみ奢を持てる人なりとぞ、
此春故郷へとて湖上の草庵を
覗かれける、猶末遠き山村野
亭の枕に、いかなる木のふし
をか侘びて、残る寒さも一入
にこそと、後見送る岐にのぞ
みて

木枕の垢や伊吹に残る雪

閑居

朝夕にせゐる火燵や春のたし

白妙に月夜烏や花の奥

眞先に見し枝ならむ散る櫻

角入れた人をかしらや花の友

更に劉伶が鋤を倩はじと興
じて

醉死なぬ先から花の埋みけり

【晋の劉伶常に鹿車に乗り一壺酒を携へ人をして鋤を荷ひて隨はしむ、蓋し醉死の時直に埋めさせんため也】

「やぶちゃん注」倩はじ」は「やとはじ」（雇はじ）と訓じ得るが、どうもしっくりこない。

「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」では、この前書が「さらに劉伶が鋤もたまじなど興じて」（「鋤」は「鋤」に同じく「すき」となっているのでそれだと、私は腑に落ちる。」

うかうかと來ては花見の留主居哉

鳶の輪の崩れて入るや山櫻

花曇田螺のあとや水の底

死んだとも留主とも知れず庵の花

塗樽の庵に立寄る花見かな

花散るや覗きあひたる岩の穴

水壺にうつるや花の人出入

片尻は岩にかけたり花薙

散る方は志賀にしておけ澳の花

「やぶちゃん注…「澳」は「おき」。この場合は琵琶湖湖岸から離れた奥の謂いか。「志賀」は琵琶湖中南部西岸（グーグル・マップ・データ）。或いはここは古来、桜の名所であったか。」

木啄や枯木をさがす花の中

笠松に舞ひもどりけり花の友

小疊の火燵ぬけてや花の下

洛東の花

落込むや花見の中のとまり鳥

病中

山がらは花見もどりや枕もと

タばえや花の波こすあらつゝみ

餞別

見送りの先に立ちけりつくづくし

咲立て柴のならぬや躑躅山

さし覗く窓へ躑躅の日脚哉

あぐらかく岩から下や藤の花

畫讃

何の葉の影ぞねぢむく雉子のてり

三月や冬の景色の桑一木

三月盡

明けぬ間は星も嵐も春の持ち

「やぶちゃん注…前書は「さんぐわつじん」で三月の終わることを言う。「やよひじん」と読んでもよからう。僅かの惜春の情を述べたもの。」

夏

時鳥啼くや湖水のさゝ濁り

飛込んだまゝか都のほととぎす

子規瀧より上のわたりかな

川越の建中に立つや郭公

ほととぎす誰にわたさむ川向ひ

啼かぬ間よ空一ぱいの時鳥

菜種殻焚くや野風の子規

杜鵑なくや榎も梅さくら

しるべして山路もどせよ杜宇

山道や壺荷にひゞく時鳥

嵯峨にて

鹿追の寝入るや藪の杜鵑

「やぶちゃん注…「鹿追」は「ししおひ」で、田畑に甚大な害を及ぼす猪（いのしし）「鹿」・シカも農家には害獣であるが、それ以上に猪は深刻であり、そうした農民によつては「鹿」とは猪に強く傾斜した指示語であった）を夜よびいて追い払う見張りの者のこと。」

木曾川のほとりにて

ながれ木や篝火の上の不如歸

月夜の松原に酔出て

狂亂のけいこの中にほととぎす

「やぶちゃん注…前書の「酔出て」は「ゑひいでて」で、「狂亂のけいこ」とは謡曲の狂女物を恰も稽古するかの如く、の謂い。」

遊長命寺

笋の鮓を啼出せ郭公

「やぶちゃん注…「たけのこのすしをなきだせほととぎす」。「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」で私が評釈してある。」

寝て待つや梅田枇杷麥蜀魂

【攝津梅田田村は枇杷と麥との名産地なり】

「やぶちゃん注…「蜀魂」は「ほととぎす」と読む。蜀の望帝の魂が化して、この鳥になったという中国の伝説に基づく。」

屋の棟の麥や穂に出て夕日影

杉なりにせり上りたる田植かな

谷風や青田を廻る庵の客

松風の中に青田の戦ぎかな

夕ばえや茂みに洩るゝ川の跡

去來が落柿舎にて

芽出しより二葉に茂る柿の實

はね釣瓶蛇の行方や杜若^{ゆくへ}

青雲や馬鋤休むる晝の芥子

晝鐘や若竹そよぐ山づたひ

子につれて返る青みや去年の竹

草芝を出づる螢の羽音かな

はしりこむ螢の中や谷の水

螢火や蟹のあらせし庭のへり

豊後龍門寺の瀧

螢火や村中に取り瀧の水

曲水の子を悼む

呼聲は絶えて螢のさかり哉

やうやうと出て啼く時か閑古鳥

仰木の里書懷

おのが音の尼や水鶏の磯の闇

【尼の字は誤なるべし】

「やぶちゃん注」・「仰木の里」は「あふぎのさと」（現代仮名遣「おおぎのさと」）で現在の滋賀県大津市仰木の里（グーグル・マップ・データ）。さて、以上のように藤井氏は注するが、では、何の字の誤りかを指示していない、甚だ無責任な注と言わざるを得ない。他の撰集を見ても（例えば『芭蕉泊船集』のここ。国立国会図書館デジタルコレクションの画像）、やはり「尼」であり、第一、この句は芭蕉の（前書は「芭蕉句選拾遺」のそれをそのまま示した）、

大津にて智月といふ老尼のすみか

を尋ねて、をのが音の少將とかや、

老の後、此あたり近く、かくれ侍

しといふをおもひ出て

少將の尼の話や志賀の雪

という知られた句を確信犯でインスパイアしたもので、逆立ちしても「尼」でよいのである。

この尼とは、鎌倉時代の歌人で中宮少將と名乗った藤原信実の娘であつた藻壁門院少將（生没年不詳）のことで、後堀河天皇の中宮九条嬪子（藻壁門院は彼女の院号）に仕え、嬪子没後に出家、晩年、この仰木の里に隠棲したとも伝える（但し、最後のそれは事実としては、かなり怪しい）。彼女は「新勅撰和歌集」巻第十三の、

おのが音につらき別れはありとだに

思ひも知らで鶏や鳴くらむ

の後朝の別れを情たつぷりに詠んだ名歌で世に聞こえ、「おのが音の少將」とさえ称された人物なのである。意味がとれないからと思いつきで注を附すと、こういう残念なことになる。私も肝に銘じておきたい。」

血を分けしものと思はず蚊の憎さ

朝日さす紙帳の中や蚊の迷ひ

衰病倚人

行先にのがれ入りけり蚊帳の中

「やぶちゃん注」前書は「病ひに衰へて、人を倚む」或いは「人に倚る」か。誰かの家に応急に待避したとなら、句の雰囲気は腑に落ちるから、後者の方が読みとしてはよいように思

われる。」

魯九剃髪せし時垂辭

蚊帳を出て又障子あり夏の月

「やぶちゃん注…「垂」の字は底本の字は私が見たことのない奇体な字（下段八行目。他の字を以って組み合わせて説明することも出来ない不思議な字である）で、「日本名著全集」の第二十七卷「俳文俳句集」の「丈草發句集」（岡島昭浩氏の「うわづら文庫」の画像。この親本は本底本と同じものと思われるが、編者による注が附されてある。PDF）を見ると、ここが『垂辭』となっており、直下に『垂示^カ』とある。魯九は丈草の唯一人の門人であり、彼が出家した際の句であるからには、禪宗に於いて、師が弟子に教えを説く「垂示^{じし}」（「示衆^{じしゅう}」）「垂語^{じしご}」とも呼ぶ）でなくてはならぬ。されば、かく示した。句意は一種の禪の公案である。」「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」の本句への私の注の、堀切実氏の評釈の引用を見られたい。」

隙明や蚤の出て行く耳の穴

「やぶちゃん注…上五は「ひまあきや」或いは「ひまあくや」。「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 一」の本句の私の注を参照されたい。」

^{イナヅマ}電のさそひ出してや火とり虫

梅本寺より歸るとて

蟬啼くやわかれて上る軒の山

「やぶちゃん注…「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」で述べた通り、この句をかつちりとした絵に出来ない私がいる。」

夕立のかしら入れたる梅雨かな

美濃の關にて

町中の山や五月の上り雲

白雨^{ユフダチ}に走り下るや竹の蟻

夕立に飛びのく月や松の上

涼しさに寝よとや岩のくぼたまり

小屏風に山里すゝし腹の上

あら壁や水で字をふく夕涼

【一本「字をかく」とあり】

突立て帆となる袖や涼舟

【一本「帆になる」とあり】

草臥の根ぬけや澳の晝涼

すゞしさの心もとなし蔦うるし

丈山の像

さかさまに扇を懸けて猶すゞし

【丈山の富士の詩、「白扇倒懸東海天」の句による、一本「又すゞし」とあり】

犬山にて市中苦熱

涼しさを見せてや動く城の松

ぬけ果てし納涼のあとや椽の月

四梅廬の納涼

打水にのこるすゞみや梅の中

【四梅廬は僧李由の別號】

澁笠に受合せけり蓮の露

浦舟の頭へしに匂ふ蓮かな

「やぶちゃん注…この句、中七は「頭」は「づ」か。自信がないが、「うらふねの／づべしににほふ／はちすかな」で、「頭」は舐^は先^{さき}で、「へしに」は副詞「壓^へ（圧）に」で、これには「やたらに」の他に「押し合つて並ぶさま」の意があるので、後者でとればよろしいか。琵琶湖の景であろう。但し、松尾勝郎氏編著「蝸牛 俳句文庫」内藤丈草（一九九五年蝸牛社刊）では、句自体を『頭べし』とされて、これで『舟の舐先』の意とされる。その方が、躓^{つまず}きはない。」

惟然行脚を送りて

炎天に歩行神つくうねり笠

「やぶちゃん注…中七は「あるきがつく」と読む。「つく」は「憑^つく」。「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」で私は以下のように評釈した。「あるき神^{がみ}」は、芭蕉が「奥の細道」の冒頭で「そろろかみの物につきてころをくるはせ」と挙げた「そろろ神」のこ

とであろう。私は『今日のシンクロニティ「奥の細道」の旅0 草の戸も住替る代ぞひなの家 芭蕉』で、『不思議な神名だ。諸注、何となく何心なく人の心を旅へと誘う神として芭蕉の造語とする。そうであろう。しかし如何にも美事な神名ではないか！ ウイトゲンシュタインも言っている。――「神は名指すことは出来るが、示すことは出来ない。」――「そぞろ神」とはまさに、そうした神の名としてコズミックでエターナルな魅力に満ちている！』と注をやらかした。相手がかの惓然なればこそこの一句素晴らしい餞別句と言える。』

雨乞の雨氣こはがる借着哉

元春法師身まかりけるに
世の中を投出したる團扇かな

旅行

帷子にあたままり待つ日の出哉

梅本寺を立出るとて
雨乞に先立つけふや破笠

秋

朝夕べ秋の廻るや原の庵
【一本「朝夕を」】

夜明まで雨吹く中や二つ星

精靈の好かれし人を集めけり

聖靈の隣ありきや山の上

魂棚や藪木をもるゝ月の影

精靈も出てかりの世の旅寝哉

舊里に歸りて
精靈に戻り合せつ十年ぶり

送火の山に上るや家の數

稻妻のわれて落つるや山の上

夜舟より上りて洒堂亭に眠
る

いなづまや夜明けて後も舟心

悔みいふ人の途切やきりぎりす

行燈に飛ぶや袂のきりぎりす

宵までや戸にうたれたる蟋蟀

踊子のかへり來ぬ夜や 蛭きりぎりす

寒けれど穴にも啼かずきりぎりす

きりぎりす啼くや出立の膳の下

物かけて寢よとや裙のきりぎりす

寢がへりの方になじむや蟋蟀

つれのある所へ掃くぞきりぎりす

病 床

虫の音の中に咳出す寢覺哉

啄木の入りまはりけり藪の松

ばせを翁へ文通の奥に

招けどもとゝかぬ空や天つ雁

山ばなやわたりつきたる鳥の聲

脱殻にならびて死ぬる秋の蟬

旅 中

蜻蛉の來ては蠅とる笠の内

啼き腫れて目ざしもうとし鹿の形

北嵯峨や町を打越す鹿の聲

あれこれを思ひはづれる花野かな

早稻の香や雇出さるゝ庵の舟

名月や雨にはりあふ風光

名月や車きしらす辻番屋

辻堂に梟たてこむ月夜かな

戸を明けて月のならしや芝の上

から樽を漏にあてけり月の雨

「やぶちゃん注…「漏」は「もり」。雨漏りである。」

野山にもつかで晝から月の客

京筑紫去年の月問ふ僧仲間

淀川の港にて

舟引の道かたよけて月見かな

發句して笑はれにけり今日の月

此句は林之助といひける

九歳の時、はじめて言出

せる句の由

「やぶちゃん注…内藤丈草の本名は内藤本常で、通称は林右衛門であった。」

友づれの舟に寝つかぬ夜寒哉

【一本に「友つれて」とあり】

「やぶちゃん注…これは表記に問題がある。先に示した『日本名著全集』の第二十七巻『俳文俳句集』の『文章發句集』の表記が正しい。則ち、

友ずれの舟に寝付ぬ夜寒哉

が正解であり、されば、藤井氏の注の一本も本来は「友ずれて」でなくてはならないことになる。これは句解を誤る大きな誤りであって、失礼乍ら、藤井氏も上五は「友連れて」であると理解されているのではなからうか。これは私の指示した「ずれ」で判る通り、そうではなく、停泊している小舟が何艘かあって、それが立て込んで繫留されてあるのである。そのために舟同士が波に揺られて「友擦れ」を起こして音と振動を齎すために、舟の中で寝ている作者が寝付かれぬというのである。疑義のある方は、『柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 四』の本句の私の注を見られたい。堀切実氏もそう評釈しておられる。」

答見寄山庵

焼栗も客も飛び行く夜寒かな

「やぶちゃん注…前書が読めない。『日本名著全集』の第二十七巻『俳文俳句集』の『文章發句集』を見ると、返り点が打たれてあるのであるが、それは『答レ見レ寄ニ山庵』とあって、これもまた、私には上手くは読めない。或いは、これ、『答レ「見レ寄ニ山庵」』で、「山庵に寄せらる」という漢詩「に答ふ」であるのかも知れない。識者の御教授を乞うものである。」

病人と撞木に寝ねる夜寒かな

【二人丁字形に寝るなり】

「やぶちゃん注…『柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六』によれば、別な撰集では、訪郷里舊友

とある（「郷里の舊友を訪ふ」）。おとな

洛の惟然が宅より故郷へ歸
るに

鼠ども出立の芋をこかしけり

鶏頭に置いて逝るや笠の蠅

鶏冠の晝をうつすや塗枕

「やぶちゃん注…『柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六』では、

雞頭の晝をうつすやぬり枕

の形で載り、『[日本名著全集](#)』の第二十七卷『[俳文俳句集](#)』の『[文章發句集](#)』でも、『[鶏冠](#)』の下に『[\(頭カ\)](#)』と注してある。』

つり柿や障子に狂ふ夕日影

木傳うて穴熊出づる熟柿哉

「やぶちゃん注：前掲の松尾氏の当該書では、「穴熊」を『冬ごもりで穴に蟄居している熊』とされるが、どうか？ これでは食肉目クマ科クマ亜科クマ属ツキノワグマ亜種ニホンツキノワグマ *Ursus thibetanus japonicus* に比定されてしまうが、それでは丈草が襲われそう
だ。これは、食肉目イヌ型亜目クマ下目イタチ小目イタチ上科イタチ科アナグマ属ニホンアナグマ *Meles anakuma* でいいのではないかと？ 同種の博物誌は私の『[和漢三才圖會卷第三十八 獸類 猯\(み\)](#)』(同じくアナグマ)及びその前項の『[和漢三才圖會卷第三十八 獸類 貉\(むじな\)](#)』(アナグマ)を参照されたい。また、『[和漢三才圖會卷第三十八 獸類 狸\(たぬき\)](#)』(タヌキ・ホンダヌキ)の私の注も参考になると思う。』

落柿舎すたれける頃

澁柿はかみのかたさよ明屋敷

【頑健なるを「かみがかたい」といへり】

「やぶちゃん注：藤井氏のそれは「頭が堅い」で「体が丈夫である」の意。平安後期には既に生じていた古語である。」

谷越に鳴子の綱や窓の中

「やぶちゃん注：前掲の松尾氏の当該書では、

たにぐし 谷越に鳴子のなは縄や窓のうち

の句形で出る。雀を追ひ払うオドシの農具で、「縄」の方が正しい気がする。」

スエプロ 居風呂の下や案山子の身の終

借りかけし庵の噂や今日の菊

嵯峨にて

竹伐の外には見えず菊の主

「やぶちゃん注：「竹伐」は「たけきり」で竹を伐採する雇われた職人のこと。松尾氏前掲書では、『菊の香の漂う閑寂な嵯峨野の風情。元禄十二年ごろの作』とされる。」

蘆の穂や顔撫上る夢さかり

蘆の穂や蟹をやとひて折りもせず

早咲の得手を櫻の紅葉かな

稻積に出づるあるじや秋の雨

松の葉の地に立並ぶ秋の雨

ねばりなき空を走るや秋の雲

伊賀へ越す時おとき峠にて

一いひおとす峠の外も秋の雲

「やぶちゃん注…「おとき峠」現在の滋賀県甲賀市信楽町多羅尾と三重県伊賀市西山町を結ぶ御斎峠。おときうげここ（グーグル・マップ・データ）。詳しくは「柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」の本句の私の注を参照されたい。」

飼猿も秋はことさら山の聲

旅瘦を見には寄らぬに秋の池

「やぶちゃん注…初五は「たびやせ」。所謂、見なかった風物を仮想した句か。よく判らぬ。」

青空や手ざしもならず秋の水

歸り来る魚のすみかや崩築

「やぶちゃん注…下五は「くずれやな」と読む。」

堂頭の新蕎麥に出る麓かな

「やぶちゃん注…「堂頭」は「だうてう」で現代仮名遣では「どうちよう」と読み、禪寺の住職を指す。」

夜嘶の長さを行けばどこの山

須磨の浦

眺めあふ秋のあてどや寺と船

行く秋や梢にかゝる鮑屑

行く秋の四五日弱る薄かな

冬

雷落ちし松は枯野の初時雨

一方は藪の手つたふ時雨かな

黒みけり沖の時雨の行處

幾人か時雨駈けぬく瀬田の橋

鳥の羽もさはらば雲のしぐれ口

屋根葺の海をふりむく時雨哉

鍋もとにかたぐ日影や村時雨

風雲や時雨をくぐる比良おもて

東湖あねりの冬空を吟じて

むきたらで又や時雨のかり着物

「やぶちゃん注：松尾氏前掲書に、『むきたらで』は、こぼし足りないで、『との意の方言。琵琶湖東岸の旅先で、まだ降り足りないのか、またもしぐれに濡れてしまった。またまた借着をする始末』と評釈されておられる。」

越中翁塚手向

入る月や時雨るゝ雲の底光り

海山の時雨つきあふ庵の上

所思

もたれたる柱も終に磯時雨

【「磯時雨」一本「幾時雨」】

「やぶちゃん注：「磯時雨」がよい。」

芭蕉翁病中祈禱の句

峠こす鴨のきほひや諸きほひ

【「峠こす鴨の羽なりや諸きはひ」の誤りなるべし】

「やぶちゃん注…松尾氏前掲書では、

峠こす鴨^{かも}のさなりや諸^{もろ}きほひ

の形で示され（其角編「枯尾花」。元禄七（一六九四）年刊）、『「さなり」は細鳴』（ほそなき）で、『細い鳴き声で競い合って飛ぶ鴨に、師の身を案ずる門人たちを仮託した句。元禄七年十月八日、芭蕉の延年祈願に之道^{しどう}が住吉明神に代参した折の句』とある。」

ばせを翁の病床に侍りて
うづくまる薬の下の寒さかな

傷亡師之終焉

暁の墓もゆるぐや千鳥數寄

「やぶちゃん注…「數寄」は「すき」で、「好き」の意の強い「好み」の意であろうか。芭蕉は句を見るに、実際に千鳥が好きではあった。」

芭蕉翁追悼

ゆりすわる小春の湖や墳の前

「やぶちゃん注…「墳」は「つか」と読みたい。」

芭蕉翁の七日七日もうつり
行く哀さ、無名庵に偶居し
て心地さへすぐれず、去來
が許へ申送る

朝霜や茶の湯の後のくすり鍋

國々の墓所も同じ蕉葉の霜
にしらめる三年の喪は疎な
らぬ中に、湖上の木曾寺は
其全き姿を収めて、人々の
ぬかづき寄る袖の泪も、一
しほの時雨をすゝむる、舊
寺の夕より朝をかけて、
梵筵吟席の勤ねもごろな

り、然れども野衲は獨り財
なく病有る身なれば、な
みなみの手向も心にまかせ
ず、あたり近き谷川の小石
かきあつめて、蓮經の要品
を寫し、その菩提を祈り、そ
の恩を謝せむ事を願へり、
誠に今更の夢とのみ驚く心
喪のかぎりに筆を抛ち、手
を拱して、唯墓前の枯野を
見るのみ

石經の墨を添へげり初時雨

「やぶちゃん注…[『柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 三』](#)に前書も含めて出るのを
見られたい。私は個人的には、上五は「しやくきやう」（現代仮名遣「しやつきやう」）と読
みたくなる。「げり」は「けり」とするものが多いが、私は断然、「げり」を推す。「平家物
語」の「木曾の最期」のその瞬間、「痛手なれば、眞甲まつかふを馬むまの頭かしらに押當おしあてて俯うつぶし給ふ所を、
石田いとうが郎等二人、落ち合ひて、既に木曾殿の首をば取つてんげり」辺りの強調形に遙かに響
き合うからである。」

芭蕉翁七回忌追福の時、法

華經頓寫の前書あり

待受けて經書く風の落葉かな

水底の岩に落ちつく木の葉哉

風のあたり所や瘤柳

奈良の玄海、蕉翁のこがら
しの身は竹齋に似たる哉と
いへる句を夢見て、其翁の
像を畫きて讃望みけるに
木がらしの身は猶輕し夢の中

飛返る岩の霰や窓の中

山中泊

電ふる宿のしまりや蓑の夜着

初霜の泥によれつ草の色

思はずの雲見や比叡の前うしろ

雪空の片隅さびし牛の留守

狼の聲そろふなり雪の暮

納豆するとぎれや嶺の雪おこし

【北國にて雪の降らんとして雷鳴あるを雪おこしといふ】

「やぶちゃん注…「納豆」は「なつと」と読む。体を温めるために、納豆を搗り潰して納豆汁を拵えている。その「ごりごり」という搗り鉢の音。ふと、何かの音に気がつく。同時にその搗る手を止める。すると、遠く暗い彼方の山の峰の方から、「雪起こし」の雷鳴が「ごろごろ」と聴こえてくる、というのである。微妙な聴覚的句で、佳品である。」

ふりかへて山から見たし雲の窓

狐なく岡の晝間や雪曇

野も山も雲にとられて何も無し

さかまくや降積む峰の雪の雲

【一本「雪の松」とあり】

「やぶちゃん注…「松」では初五の「さかまくや」が行き場を失ってしまつてよくない。」

折れあうて中行く道や雲の友

都の人に申遣しける

山雲の餘りをやれば京の雪

嵯峨の野明別荘にて

柴の戸や夜の間に我を雪の客

去來が菴を訪ひ來れるに別
るゝとて

雪曇身の上を啼く鳥かな

村雲の岩を出づるや吹雪の根

しまき来る雪の黒みや雲の間

淋しさの底ぬけて降る霰哉

背戸口の入江に上る千鳥かな

小夜千鳥庚申待の舟屋形

水底を見て來た顔の小鴨哉

夜烏をそやし立てけり鴨の群

「やぶちゃん注…「そやし立つ」は、「囃し立てる・冷やかす」の意。」

霜腹の寢覺々々や鴨の聲

「やぶちゃん注…「霜腹」は「しもばら／しもはら」で、「霜の降りるような寒い夜に冷えて起こる腹痛」のことを指す。」

櫓の火や曉がたの五六尺

草庵の火燵の下や古狸

下京を廻りて火燵行脚かな

ほたほたと朝日さしこむ火燵かな

守り居る火燵を庵の本尊かな

「やぶちゃん注…「庵」は「いほ」、「本尊」は「ほぞん」。」

吹く嵐あらしや今は山やお

もふ行く曉の寢覺なりしを

といふを誦して

山やおもふ紙帳の中の置火燵

「やぶちゃん注…[柴田宵曲](#) [俳諧隨筆](#) [蕉門の人々](#) [丈艸](#) 六」の本句の私の注を参照されたい。」

炭賣や隣の人が焚きに行く

紙子着て寄れば火燵の走り炭

「やぶちゃん注…一九八九年岩波文庫刊の堀切実氏の編注になる「蕉門名家句選（下）」では「鳥の道」（玄梅編・元禄一〇（一六九七）年序）の句形、

かみこきて寄よばいろりのはしり炭

の句形を示されて評釈され、『紙子を着て囲い炉裏ろりのそばに近寄ると、突然』、『炭火が跳ねて紙子に飛んできたので、あわててもみ消したというのであろう。なけなしの一張羅の紙子であり、焼穴でもできたたら大変だといったところであろう』とある。注に掲句の句形は「篇突」（許六・李由編。元禄十一年刊）及び蝶夢編「丈草發句集」とする。」

貧 交

まじはりは紙衣の切を譲りけり

「やぶちゃん注…「紙衣」は「かみこ」。紙子に同じい。「切」は「きれ」。

一夜さに猫も紙子もやけどかな

居寝さへかゝらぬものなり

ければ、立別るゝ宿の跡も

然こそと思ひて、

踏破る紙帳の穴や置土産

「やぶちゃん注…禅僧として非常にストイックな姿勢を常としている丈草にして——してやったり！——の面白い句である。」

鶏の片足つつや冬ごもり

静さを数珠も思はず網代守

「やぶちゃん注…初五は「しづかさ」を、「数珠」は「じゆず」、座五は「あじろもり」。「柴田宵曲 俳諧随筆 蕉門の人々 丈艸 一」の本句の私の注を参照されたいが、補足すると、私は秘かに「じゆずも」という発音は「しゆゆも」に通じて、「須臾も」で「ほんの一瞬さえも」の意を掛けているのではないかと思っている。」

舟岡に影氷らすや鉢たゞき

【舟岡は京の墓地】

一月はわれに米かせ鉢たゞき

うら門の竹にひゞくや鉢敲

長崎卯七渡鳥撰集の時

句選や霰降る夜の霰酒

「やぶちゃん注…[柴田宵曲](#) [俳諧隨筆](#) [蕉門の人々](#) [丈艸](#) [五](#)」の冒頭に配された、丈草の「渡鳥集」の賀詞部分と私の注を参照されたい。前書を含めて総て判るように注してある。」

水風呂に笕にかけて谷の柴

鷹の目の枯野にすわる嵐哉

神松のさえこむ影や禰宜の夢

「やぶちゃん注…「神松」は「かみまつ」で御神木の松樹。このような寒冴えた境内で、果して、禰宜^{ねぎ}は、どんな夢を見ているのだろうか、という謂い。」

黒海苔は雪海苔ともいふ、

岩間に降積れる雪の日に照

されて、此物とはなれりと

ぞ、浪化より恵まれしに取

りあへず

海苔の名やたゞ打見には雪と炭

「やぶちゃん注…前書を含め、[柴田宵曲](#) [俳諧隨筆](#) [蕉門の人々](#) [丈艸](#) [六](#)」で誰にも負けない詳細さで私が注してあるので、是非、読みたい。」

あら猫の駆出す軒や冬の月

「やぶちゃん注…「あら猫」^{たち}。性質の悪い野良猫。」

雲よりも寒し白髪に冬の月

獨法師はなかなかの手廻し
にて

煤掃や山風うけて吹通し

「やぶちゃん注…「獨法師」は「ひとりほふし」で丈草自身を指す。「煤掃」は「すすはき」で正月を迎えるため、普段は手の届かないようなところまで大掃除をする行事。江戸時代には概ね十二月十三日に行なうのを通例とした。」

寒は既望の日より明けて、

風景殊更に悠然たり

十五日春やのしこむ年の暮

「やぶちゃん注…「既望」陰曆十六日の夜を指す。この句も「[柴田宵曲](#) [俳諧隨筆](#) [蕉門の人々](#) [丈艸](#) 六」の私の注で細かに解説済みである。一言言っておくと、この句は陰曆の年内立春を詠んだ句の一つである。だから「春」が「のしこむ」(乗越^{のりこ}して来る)なのである。」

行燈を消せば鼠の年忘

追鳥も山へ歸るか年の暮

「やぶちゃん注…「追鳥」は「おひどり」で「狩りする人に追われている鳥」のこと。」

安永三年六月

翠樹堂

追加

鶯に取らばや庵の風ふせぎ

「やぶちゃん注…「風ふせぎ」は「風防ぎ」で、冬季の寒気・寒風を防ぐために窓を竹や篠で囲ったものを指す。」

着て立てば夜の衾もなかりけり

影法師の横になりたる火燵哉

「やぶちゃん注…表面上は滑稽を狙っているように見えるが、寧ろ、私は陶淵明の「形影神」を想起し、ただならぬ境涯の句境を指示したものと感ずる。」

白粥の茶碗隈なし初日影

酒賣のもどりは樽に野梅かな

子規たしかに峯の早松茸

とゝ川の春や暮れ行く葭の中

「やぶちゃん注…「とゝ川」は松尾氏前掲書では、句自体を「どゞ川」と表記し、座五を「よしのなか」と訓じている。而して『どゞ川』は泥深くよごれた川。泥川』とする。「よし」の読みは、植物としてのヨシに「暮れ行く」「由」の意を掛けているのであろう。松尾氏は元禄一五（一七〇二）年晩春の作とする。」

船待の笠にためたる落葉哉

月代や時雨の中の蟲の聲

「やぶちゃん注」柴田宵曲 俳諧隨筆 蕉門の人々 丈艸 六」に出、私が注してある。」

粟津野や山から京のほとゝぎす

「やぶちゃん注」粟津野「あはづの」は滋賀県大津市南部の地名（現在、[大津市粟津町](#)（あわづちよう）（グーグル・マップ・データ）として名が残る）で、古来より交通の要地であった。「逢はず」の意味を掛けて「粟津野」「粟津の原」などの形で歌に詠まれた歌枕である。」

荊口尋ねられしに

名月の前へまはるや旅枕

「やぶちゃん注」「荊口」は蕉門の美濃大垣藩士であった宮崎荊口（？）享保一〇（一七二五）年。名は佳豊。大垣蕉門の長老で、元禄二（一六八九）年に大垣を訪れた芭蕉を歓待している。子の此筋・千川・文鳥も俳人であった。元禄十六年八月の十五夜の吟。」

賀助然于山彦撰集

月花や好きこたへある里の山

「やぶちゃん注」前書は「助然が『山彦』の撰集するを賀す」か。「助然」は蕉門の俳人荒巻助然（あらまきじよねん？）元文二（一七三七）年で筑前の人。名は重賢。父の西竹を初め、子の助嶺・苔路・仙之らも俳人であった。没後に志太野坡と苔路により、追善集「冬紅葉」が刊行されている。「山彦」は宝永二（一七〇五）年刊の彼の代表的撰集。」